浅野総一郎とコレラ

荒井保男

浅野総一郎は東京湾開発のパイオニアであり、海面埋立てによる一大京浜臨海工業地帯を形成した実業界の傑物である。

ここでは総一郎がコレラによって志を立て廃物利用によって財を成し、実業家としての地歩を築いた波瀾に満ちた彼の前半生を、横浜市の公衆衛生との関連から考察し報告するものである。

浅野総一郎は嘉永元年（一八四八）富山県氷見郡薮田村の医家の長男に生まれた。六歳の時叔母の嫁入先である氷見町の医師宮崎南禎の養子となった。文久元年氷見町を中心に周囲の数か村に惨虐なる「コロリ」が流行した。現在のコレラである。自伝によれば「コロリ（虎列刺）の大流行で恐ろしい目に遭い医者が嫌になって夢中で養家を逃げ出した。」という。

以後実家で種々の事業を起こすがすべて失敗し、明治四年横浜に出て、故郷の知人の営む小倉屋に奉公した。ここで味噌醤油に使う竹の皮の意外に高値なるを知り、独立して竹の皮の販売の傍ら薪炭を取扱い、やがて石炭商となった。さらに廃物のコークスが燃料として役立つことを知り、これを販売して予想外の利益を得た。また当時横浜の辻々に作られた便所は汚く、所によっては糞尿が道に溢れて非衛生なること「この上なし」という状態であった。彼はこれらの便所を廃統合し、新に清潔な公共便所（公衆便所）を六三か所作り、これらの便所の清潔にも大いに力を注ぐ一方、この糞尿を近郊農村に売ることによって多額の富を得た。

かくするうちに明治十五年横浜市にコレラが流行した。当時消毒に絶大な信頼を得ていたのは石炭酸であった。石炭酸の原料がコールタールであることが判明したのもこの頃で、彼が買いこんでいた厖大なコールタール量は一変して莫大な黄金と化していった。

石炭、コークス、コールタール、便所清掃で巨満の富を得た総一郎は明治十四年渋沢栄一の斡旋で、工部省の深川のセメント会社の払い下げを受け、財界への第一歩を踏み出してゆくのであった。

（平成六年九月例会）